

「甘え」(土居) と “vitality affects” (Stern)*

—「甘え」理論はなぜ批判や誤解を生みやすいか—

西南学院大学人間科学部社会福祉学科 小林 隆児**

要旨：精神病理と精神療法の領域において、わが国独自に生み出された土居の「甘え」理論は、今や世界的にも評価され、学問的普遍性を持つに至っている。しかし、いまだに「甘え」理論に対する批判や誤解は少なくない。そのひとつの大きな理由は、「甘え」に対して多くの人が抱きやすいのが屈折した「甘え」にあるからである。土居は「甘え」を概念として用いているため、「甘え」が現象としては一見すると不在に見えても、その欲動が抑圧されるか否定されるというかたちで無意識に潜んでいると解釈し得ることをも含めていたにもかかわらず、「甘え」が具体的な現象として捉えられやすいことからくる理解の困難さである。筆者は関係発達臨床の立場で、自閉症スペクトラム障害の大半の事例で、対人関係の中核の問題として子どもの「甘え」にまつわるアンビヴァレンスがあることを見て取った。土居が「甘え」のアンビヴァレンスを軸に精神病理の理解と精神療法の可能性の道を切り拓いたことに意を強くし、筆者は土居の「甘え」理論に対して、自らの立場から再照射を試みてきた。本論の試みもその一環である。

本論では、屈折した「甘え」という目に見える現象のみでなく、「甘え」のアンビヴァレンスが原初の段階、すなわち乳幼児期においてどのような表現型を取るかを示すとともに、Stern 理論の鍵概念のひとつである “vitality affects” を用いることによって、「甘え」のアンビヴァレンスがより捉えやすくなることを示した。さらに、土居がメタファーと精神療法の関係について論じているのを受けて、筆者はメタファーを生み出し、「甘え」のアンビヴァレンスを感知することを可能にする上で重要な役割を “vitality affects” が果たしていることを述べ、その過程は、精神分析療法における転移と解釈の理解にも通じることを示した。以上の観点より、「甘え」にまつわる心の動きを “vitality affects” を通して理解し直すことにより、これまでの「甘え」理論に対する批判や誤解を減じることが可能ではないかと提起した。

Key Words : 「甘え」、解釈、メタファー、転移、力動感

“amae”, interpretation, metaphor, transference, vitality affects

I. はじめに

わが国の精神病理や精神療法の領域において、独自に生み出された理論として今なお色褪せていないもののひとつに土居の「甘え」理論¹⁾がある。「甘え」理論の根幹をなしているのは、「甘え」の

アンビヴァレンス、あるいは屈折した「甘え」に焦点を当てたことにあるが、その結果、多様な精神病理の理解とその精神療法への道が切り拓かれた。

筆者はこれまで乳幼児期早期に対人関係の成立に深刻な問題をもつ子どもたち（今日でいうとこ

* “Amae” (Doi) and “vitality affects” (Stern) : Why is “amae” theory frequently criticized or misunderstood?

** Ryuji Kobayashi, Division of Social Welfare, Department of Human Sciences, Seinan Gakuin University (2011年12月5日受理)

ろの自閉症スペクトラム障害にほぼ該当しようが)とその養育者に対して、その関係性に注目することにより、様々な精神病理の理解と精神療法の可能性について言及してきた^{11, 12, 14, 15, 18, 19, 23)}。このような立場を筆者はこれまで関係発達臨床と称して、臨床的知見を積み重ねてきた。そこで筆者が常に心掛けてきたことは、彼らに認められる多様な症状や障害という臨床上の表現型に惑わされることなく、その背後のこころの動きに着目した臨床的接近であった。すると、乳幼児期から成人期に至るまでのいかなるライフ・ステージにあっても^{15, 19)}、さらには症状や障害が行動面に^{12, 23)}あるいは言語面に¹⁴⁾表現されようが、彼らの背後のこころの動きに沿った治療的接近を試みることによって、多くの場合、症状や障害は背景に退き、それに代わって彼らの内面のこころの動き、つまり「甘え」が前景に浮かび上がってくることが確認された。筆者がそこで見出した最大の成果は、いかなる症状や障害を呈していようと、その背景にある中核的問題は子どもの養育者に向ける「甘え」のアンビヴァレンスにあることであった。

「甘え」理論と関係発達臨床での主張が呼応していることに意を強くした筆者は、土居の「甘え」理論を自らの依って立つ関係発達臨床の実践を通して再照射することに着手した^{16, 17, 20-22)}。その中で筆者は、「甘え」のアンビヴァレンスは乳幼児期から成人期の生涯発達過程のいかなるライフ・ステージにおいても、潜在的にあるいは顕在的に捉えることができ、それに焦点を当てることによって精神療法の道が切り拓かれることを示し、「甘え」のアンビヴァレンスの治療的意義を検討してきた^{16, 17)}。さらに精神療法において「甘え」にまつわる現象を捉えることを可能にしているのは原初的知覚としての“vitality affects”²⁹⁾(注1)であるこ

とを指摘し、「甘え」と“vitality affects”の近似性についても言及した^{20, 22)}。

「甘え」理論の独創性とその意義を再認識した筆者であるが、その一方でこれまで「甘え」理論は誕生した当初から、多くの批判や誤解を生んできたことも事実であった。そこで筆者は、「甘え」理論がなぜ批判や誤解を生みやすいのか、その問題の所在を少しでも明らかにし、「甘え」理論が人間の生涯発達過程における精神病理と精神療法を深める上で、今なお重要性を失っていないことを論じてみたい。その際、「甘え」とStern理論の鍵概念のひとつである“vitality affects”との類似性に再度着目することで、これまでの「甘え」理論に対する批判や誤解を乗り越えることができるのではないかと思われる。

なお、本稿を本誌にて論じようと思った大きな動機は、本稿の主張が精神分析療法の技法の柱である転移と解釈に深く繋がっていると考えたからである。

II. 「甘え」(土居)をめぐる

「甘え」について

これまで「甘え」理論については幾多の批判がなされてきた。その多くは「甘え」の定義を巡っての論争であった^{9, 31)}。その議論の中心にあるのは「甘え」という具体的な特殊状況をさす日常語に普遍的な意味を持たせて学術用語として使用することの是非をめぐる問題で、そこでは精神分析的概念として用いる際の「甘え」はどのように定義されるのか定かではないというのが主だった批判であった。さらに最近では土居・長山論争^{5, 6, 26, 27)}がある。そこで土居は「甘え」がなぜ誤解されやすいかについても言及しながら、「甘え」を再度以下のように説明している。

注1) “vitality affects”の訳語について一言断っておきたい。Stern²⁹⁾の翻訳では「生気情動」と訳されているが、筆者は鮎岡²⁹⁾にならって、これまで一貫して「力動感」を用いてきた。その大きな理由は、「生気情動」が日本語として馴染みにくいこと、「力動感」の方がその実態をより忠実に反映していると考えたからである。Stern自身も本稿で取り上げた最新の著書³⁰⁾で、“vitality affects”をやめて、“dynamic forms of vitality”へと用語を変更している。そのひとつの理由として、“vitality affects”はemotionの一種と受け取られやすいことにあると彼自身説明していることからわかるように、“vitality affects”についてはまだ議論の多いところである。なお、Stern²⁹⁾自身が“vitality affects”を“dynamic forms of vitality”へと変更しているゆえ、本来であれば、本稿でもそれに倣って“dynamic forms of vitality”を用いるべきかもしれない。しかし、今回の変更の理由を考えると、「力動感」はSternの意図からもより適切な訳語であると考えられるので、敢えて「力動感」としての“vitality affects”を用いている。

「私（土居）は「甘え」は「甘える」の動名詞として「甘える」心の動きが如何様にせよ働いている場合をさすと考え、その原型は乳児が母親を求めることにあるとする。要するに、「甘え」は……（中略）……概念である。それは精神分析的思考においては対象関係を求めての原初的衝動に相当することになる」⁵⁾(p. 322)。

「私がやったことは、『甘え』が現象として不在と見える場合も、その欲動が抑圧されるか否定されるという形で無意識に潜んでいると解釈し得ることを示すことであったのである」⁶⁾(p. 972)。

「甘え」は「甘える」の動名詞であるゆえ、「甘える」ことに関連するあらゆる事象が包含され、表面的には「甘え」とは全く関係ないかのように見えながら、潜在的に「甘え」が関わっていると考えられるものを含むというわけである。そもそも「甘え」は、乳児期の後半になって初めて現われることからわかるように、人生の最早期に出現する精神発達に関わる事象である。つまりは原初段階における人間関係の成立に関わるものである。このような原初段階における体験は、その後の生涯発達過程における人間関係の営みにおいて、その原型として脈々と生き続けることになる。したがって、「甘え」にまつわる体験は、単に人間関係の成立にのみ関係するのではなく、精神発達のあらゆる領域において、陰に陽に深く浸透し、影響を及ぼし続けることになる。土居が人間の心の理解を探究するにあたり、いわばなんでも「甘え」で説明したり、解釈したりすることができるようになったのは、ある意味では至極当然の結果だということもできるのである。

「甘え」理論はなぜ誤解を生みやすいのか

なぜ「甘え」が誤解を生みやすいのか。この点について土居は簡潔に次のように述べている。「……『甘え』理論を一部の人々に理解困難なものとしている最大理由は、結局『甘え』を概念として用いるということが理解しにくいためであることがよくわかった」⁵⁾(p. 329)と。つまりは「『甘え』が現象として不在と見える場合も、その欲動が抑圧されるか否定されるという形で無意識に潜んでいると解釈し得ることを示すこと」⁶⁾(p. 972)

が容易には理解されないのである。その一方で、日常われわれが「甘え」を用いる場合の多くは、屈折した「甘え」の如く一見して「甘え」とわかる事象においてである。なぜなら健康な「甘え」は相互的な信頼に根ざしたものであるがゆえに⁷⁾(p. 95)、表立って示されることは少なく、さり気ないかたちを取ることが多いからである。それゆえ「甘え」を現象としてしか理解できない者にとっては、たとえ無邪気な「甘え」を感じ取ることはあっても、多くの場合「甘え」を屈折した「甘え」に代表させてしまいがちになるがゆえに、「甘え」を否定的に捉えてしまうことになりやすい。このことが「甘え」理論に対する批判や誤解を生んできたひとつの大きな理由ではないか。

さらには、「甘え」の概念をめぐる、その曖昧さが批判的になることも少なくないが、そもそも「甘え」という情緒を意味する概念を、ある特定の言葉で表現し尽くすことは原理的に不可能である。「甘え」がことばを生み出す底流に蠢いている情動であることを考えると、その視点の違いから幾多の表現が生まれてくるのはある意味で必然的なことである。その曖昧さや恣意性を批判するのは外的外れの議論であると思われるのである。実はこのような「甘え」理論に対する批判の類いは、“vitality affects”についても同様に行われてきたことが最近の Stern の著書³⁰⁾を読むとわかる。そこで次に“vitality affects”について言及してみよう。

Ⅲ. “vitality affects” (Stern) をめぐって

原初的知覚としての“vitality affects”

“vitality affects”は原初的知覚の一種で、われわれが通常取り上げることの多い感覚を意味する五感(味覚、嗅覚、触覚、視覚、聴覚)とは異なり、五感に分化する以前の未分化な段階、つまりは原初段階の知覚状態である。この原初的知覚としてもうひとつの重要な概念に、相貌的知覚 physiognomic perception³²⁾があるが、これについては後で少し触れることになる。

“vitality affects”の最大の特徴は、あらゆる刺激の動きの変化、つまり瞬間瞬間の変化を刻んでいく動きを感じ取ることにとりわけ鋭敏なところ

にある。このように刻々と変化する動きは、横断的に固定したかたちで把握することはできず、「いま、ここで」直接関与するかたちでしか捉えることのできない性質のものである。ことばにすることの困難な直接的体験である。ことばを換えて言えば、「リアリティ reality」ではなく、「アクチュアリティ actuality」の問題だということである¹⁰⁾ (p. 30)。“vitality affects”がこのような性質を持つことを考えると、われわれの日常的な営みである精神療法の実践において、“vitality affects”がいかに重要な役割を担っているかがわかる。

“vitality affects”は〈知覚—運動—情動〉過程である

原初的知覚としての“vitality affects”の特徴としてもうひとつ忘れてならないのは、単に動きの変化のみを鋭敏に感知しているのではないということである。知覚過程、運動過程、情動過程は、一見すると各々独立した精神機能の如く理解されやすいが、原初段階においては、これらの各過程は同時的に、分節化されないかたちで機能している。身体を動かせば、自ずから情動も揺さぶられ、同時に知覚のありようも変容する。たとえば、身体が心地よく揺さぶられれば、情動も快の興奮を呈し、その際の外界知覚は好奇心が掻き立てられるほどに快の様相を示す。しかし、不意に不安な状況に置かれたならば、身体は凍りついて固まり、外界刺激も恐ろしい形相で迫ってくる。このように、原初段階では、情動、運動、知覚などの諸機能は不可分に未分節なかたちで、共時的に働いているものなのである。これまで筆者が〈知覚—情動—運動〉過程と称してきたのはそのためであって^{15, 19)}、けっして知覚の特性のみ抽出すれば済むというものではない。

“vitality affects”から“dynamic forms of vitality”へ

Stern³⁰⁾は“vitality affects”について、あまりにも批判や誤解が多いことに辟易したのか、“dy-

namic forms of vitality”という新たな概念のもとに、“vitality affects”について1冊の書を纏めている。本書で“vitality affects”から“dynamic forms of vitality”に替えた経緯について以下のように述べている。

「私 (Stern) はこれまで長年にわたって、臨床経験の力動的観点に関心を持ち続けてきた。そして、この観点からいろいろな専門用語を使用してきた。“vitality affect”, “temporal feeling shapes”, “temporal feeling contours”, “proto-narrative envelopes”, “vitality contours”, “dynamic forms of vitality” などである。Koppe ら^{24) (註2)}はこのように用語が変わることによって生まれるいくつかの問題を指摘している。用語の変化は概念の変化を伴っているのかどうかという疑問である。答えは「はい」ともいえるし、「いいえ」ともいえる。なぜこのようにいろいろと用語を変えてきたかといえば、その主な理由は、力動的な用語を厳密にことばに当てはめることは困難で、私が主張したいことを完全に把握することはけっしてできないからである。今でもなお新たな試みを続けているが、いまだ満足していない。別な言い方をすれば、用語の変化は必ずしも概念に重要な変化を生んでいるのではない。私の思いは、概念が変わったというよりも、いろいろと異なった概念の枠組みを通して、そのことを改めて強調することにあつた。本書では、これまでいろいろと述べてきたいくつかの用語を集めてひとつにし、それらをより包摂する概念として“dynamic forms of vitality”を用いている。この用語は、以前議論した“時間 time”と“強度 intensity”の他に、“力 force”, “動き movement”, “空間 space”, “方向性 directionality”, そして“生命感 aliveness”を加味したものになっている」(p. 17)。

“vitality affects”はどのように表現されるか
では Stern 自身は“dynamic forms of vitality”ないし“vitality affects”の重要性をどのように主張しているのか。彼の主張をみてみよう³⁰⁾。

注2) この論文の発表年が、本文では2007年、文献欄では2009年となっているが、いずれも誤りで、2008年が正しい (EBSCOhost データベース調べに依った) のでここでは修正した。

「dynamic forms of vitality」は体も心もともに動くように働き、当事者もそれをせいぜいかすかにしか気づくことはできず、意識化することも困難である。その大半は事後的にしか気づくことができない性質の現象である。これが機能しなくなると、世界の興味の大半は失われ、人間関係においても、芸術の世界においてもなら感動や好奇心をもたらさないものへと変質していくほどに、人間の生命活動においてもっとも基本に流れているものである。「dynamic forms of vitality」が失われると、アナログ的なものからデジタル的なものへと変質していくようなものである」(p. 4)。

このようにアクチュアルにしか捉えることのできない現象をわれわれは精神療法においてどのように体験し、言語化することができるのか。このことについて Stern は次のように述べている。患者が「何を語ったか」、「なぜそう語ったか」ではなく、「いかに語ったか」に留意せよと (p. 8)。患者の語りがどのように行われたか、そこに患者の思いが反映されているからなのであろう。「dynamic forms of vitality」がどのように表現されるのかといえば、その多くは副詞や形容詞で示される。その具体例として、「爆発的な exploding」、「波打つような surging」、「加速度的な accelerating」など、多くの例を列挙している (p. 7)。

IV. 「甘え」と “vitality affects”

「甘え」と “vitality affects”

土居が「甘え」に着目して最初に手掛けたことは「甘えたくても甘えられない心」のありようの重要性を発見したことであり^{1,2)}。それが「甘え」のアンビヴァレンスである。そのことについて土居は以下のように述べている。「『甘えたくても甘えられない心』という言葉で表現し得るような精神状態のひとつのゲシュタルトは神経質患者に特有なものである」¹⁾ (p. 739) と。土居は患者の示す精神病理の背後に「甘え」にまつわる心の動きを見て取ったのだが、それは「甘えたくても甘えられない心」の動きをゲシュタルトとして捉えたことを意味し、このような心の動きのゲシュタルトを捉える際に重要な役割を果たしているものこそまさに “vitality affects” であるのだ。“vitality

affects” は人間の情動（心）の動きや変化をゲシュタルトとして捉えることに特徴をもつが、土居が患者との面接で「甘え」の問題を見て取ることができたのは、この “vitality affects” の働きに依るところが大きかったということである。その際何より大切になるのは、このような他者の心のありようを掴むためには、自らの心のありよう、つまりは自分の「甘え」のアンビヴァレンスをわかっているなければならない。土居の発見の背景には、土居自身の悲壮なまでの「甘え」にまつわる体験²⁾があり、それに対する深い内省があったからに他ならないのだ。そのことについて、土居は次のように述べている。「……同一化できるということは『甘え』を知っているということでもある。治療者は自分の『甘え』がわかっているので患者の『甘え』を、たとえそれが単なるほめかしてであっても、患者自身はそれを自覚できないでいる場合もキャッチすることができる。大体『甘え』というものが本来無自覚なのだ。もちろん同一化も同じことである。治療者はしかしそれが自覚できるのでなくてはならない。無自覚で始まっている『甘え』にせよ同一化にせよ、それを萌芽の状態にとらえることが肝要である。それでこそ本当の治療者である。かくして初めて重い病理の患者も治療関係に入ることができるのではないか」³⁾ (p. 123) と。

このように他者の心のありようを理解するという共感的理解は、他者のこころのありようと自らのこころのありようとの間に相同的なゲシュタルトを感じ取ることによって可能になるが、そこでの “vitality affects” の果たしている役割を忘れてはならない。したがって、土居が「甘え」のアンビヴァレンスを発見できたのは “vitality affects” の働きに大きく依っているということもできる。ここに「甘え」と “vitality affects” との深い繋がりを捉えて取ることができるのである。

「甘え」への批判や誤解は “vitality affects” によって減じることができるか

先に「甘え」が批判や誤解を生みやすいことについて言及したが、ここで再度とりあげてみたいのは、「甘え」と “vitality affects” の比較検討で

ある。このことが「甘え」の批判や誤解を減じることにつながるのではないかと思えるからである。

土居は「甘え」概念と精神分析との関係を論じる中で以下のような指摘をしている⁷⁾。「この(精神分析を専門として成り立たせる根本の)考え方は、一言で言えば、精神現象というものは必ず何らかの意向を持っているということである。別の言い方をすれば、精神現象はすべて人間関係を前提としており、人間関係の中での機能を持っているということになる」(p. 78)。「一見コミュニケーションの用をなさないように見えるものも含め精神現象すべてをコミュニケーションの相のもとに見ることが可能である」(pp. 78-79)。「それ(「甘え」という言葉の意味内容)は人間関係において接近を喜ぶ感情を示す。それはまたそのような感情を持つことを欲することであると言えることである。更に(略)「甘え」現象はふつう非反省的・非言語的に起きる」(pp. 84) (括弧内は筆者の加筆部分)。

これら土居の指摘からもわかるように、「甘え」においては接近という動きの変化が快の情動興奮を引き起こす。しかし、「甘え」のアンビヴァレンスが強い状態にあつては、接近は逆に不快な情動を誘発するがゆえに、思わず回避的反応が誘発されることになる。筆者はこのような現象を乳幼児期早期の子どもとその養育者を対象にした母子ユニット(Mother-Infant Unit)¹¹⁾での臨床において幾度となく認め、それをこれまで多くの機会に取り上げてきた^{15, 18, 19)}が、その中でもとりわけ最早期の乳児段階で筆者が捉えた「甘え」のアンビヴァレンスの表現型は以下のような特徴を示している。一見すると子どもはいつも母親を避けているように思われるが、実際にはそうではなく、母子が互いに離れていると、子どもは母親への関心をそれとなく示して、相手をしてもらいたそうにしているが、母親がいざ直接関わろうとすると、途端に回避的態度を取って、まるでかまってもらいたくないような仕草を示している。ここに示された母子間のこころの動きのゲシュタルトに、筆者は「甘えたくても甘えられない」心理を読み取るとともに、「甘え」のアンビヴァレンスの原初形態は恐らくこのような回避的反応にあるのでは

ないかと考えた^{16, 17)}。しかし、このような現象をも「甘え」の問題として捉えることはなかなか容易なことではない。土居のいう「萌芽の状態」での「甘え」の問題だともいえようが、これを“vitality affects”を用いて考えると、さほど抵抗なく理解できるように思えるのである。なぜかといえば、接近や回避という運動が快/不快という情動と共時的に機能するというのはまさに“vitality affects”の特徴そのものであることから、このような動きをわれわれは容易に察知することができるのである。つまり「甘え」という日本人にとってあまりにも自明すぎることばに換えて、“vitality affects”を持ち出すことによって、日常語の「甘え」の多義性に惑わされることなく、ゲシュタルトとして感知することが可能になり、「甘え」にまつわる幾多の誤解を減じることができるのではないかと期待されるのだ。さらに“vitality affects”を用いることによって理解の幅が広がるのは、このような運動や情動が、知覚そのもののありようとも深く関連していることを教えてくれるからである。そのことについて筆者は土居の論文「勤と勤繰りと妄想³⁾」を再照射する中で論じたことがある²²⁾。土居が取り上げた統合失調症の妄想的体験様式は、それまでの周囲世界の相貌性が急速に変貌を遂げ、迫害的な色彩を帯びていることを示しているが、このような変化の引き金となっているのが、「愛情に関連のあることが感じられるとき」だという。これこそ「甘え」にまつわる感情が強く揺さぶられていることを示しているが、それは潜在化していたアンビヴァレンスがそのことによっていたく刺激されたと考えられるからではないか。「甘え」にまつわる感情が刺激されると、強いアンビヴァレンスを抱えた患者であれば、内面に強い動揺が起こり、様々な異常行動や症状が出現するのは、これまで筆者が発達障害を対象に明らかにしてきたことであるが^{15, 18, 19, 23)}、このことは統合失調症においても該当するのではないかと思われるのである¹³⁾。そして、このような体験様式の特徴こそ、原初的知覚そのものの働きであるということである。ただここでいう原初的知覚においては、“vitality affects”というより、もうひとつの相貌的知覚 physiognomic percep-

tion³²⁾の果たしている役割が大きいと考えられるのである。

以上の如く、「甘え」を“vitality affects”を通して改めて見直すと、「甘え」にまつわる心の動きを体験する際には、そのゲシュタルトが同時に情動の変化を誘発し、何らかの言動として現われるということである。とするならば、「甘え」のアンビヴァレンスの現われは、屈折した「甘え」の如く、誰の目にもよく分かるような言動ばかりではないのだ。先に述べたように、アンビヴァレンスの萌芽の状態にあつては、他者の接近に対して思わず回避的行動を取るなど、さり気ないかたちで現われているのだ^{16,17)}。したがって、このような萌芽の状態にあるアンビヴァレンスを察知するためには、屈折した「甘え」としてというよりも、「他者の接近に対して思わず回避的行動を取る」という二者関係における両者のこころの動きのゲシュタルトとして捉えるという知覚体験として理解することの方がより容易になるのではないかと思う。このように考えていくと、屈折した「甘え」は、この萌芽状態が様々に修飾された結果の表現型だと見なすこともできよう。よって、「甘え」のアンビヴァレンスの問題が屈折した「甘え」に代表されるものとして理解されている限り、「甘え」に対する批判や誤解は避けて通ることはできないように思う。ほとんど誤解としか言いようのない幾多の批判を目にすると、今回筆者が主張した「甘え」にまつわる心の動きを“vitality affects”を通して改めて見直すことにより、面接過程でアンビヴァレンスの現われをより鋭敏に感知することができるのではないかと思うのだ。アンビヴァレンスの萌芽段階がいかに微妙な表現型を取るかを“vitality affects”を通して見直すということである。そのことにより、「甘え」に対する批判や誤解を減じることができるのではないかと期待されるのである。

V. メタファー、転移、解釈

メタファー、転移、“vitality affects”

土居は今となっては遺言となった『臨床精神医学の方法』⁸⁾(pp. 173-175)の中で、精神療法を行う上でメタファーを解するようになることが、殊

の外重要であることを力説している。このことに刺激を受けて、最近筆者は“vitality affects”の観点からメタファーと精神療法の関係について論考を纏めた²⁰⁾。その中で指摘したのは、メタファーは、喩えるものと喩えられるものとの間の共通性を感じ取って表現される修辞法のひとつであるが、そこで見出される共通性とは先ほど述べたゲシュタルトそのものであり、それを見出すことを可能にしているものこそ“vitality affects”だということである。たとえば、「とげとげしい話し方」という修辞的表現は、とげが刺さったときの痛みのゲシュタルトと、その話し方を聞いた際に感じるゲシュタルトとの間に、その相同性を見て取ったがゆえに成り立つメタファーである。

さらに土居は転移の論理構造がメタファーと同じだともいう⁸⁾(p. 175)。転移は乳幼児期の親子関係のありようが現在の〈患者-治療者〉関係において再現することを指すが、転移の中で再現するのは、けっして具体的に目に見えるかたちでの過去のことばや行動そのものではなく、患者のこころの動き、つまりは過去と現在との間で捉えた相同的なゲシュタルトである。土居はそこに「甘え」にまつわるこころの問題、つまり「甘え」のアンビヴァレンスを鋭く見て取ったのだ。このように対人関係の心の動きをゲシュタルトとして捉えて、その相同性を感知することを可能にしているものこそ“vitality affects”であることを考えると、メタファーと転移の論理構造が同じだという土居の主張は極めてよく理解できるのである。

メタファー、転移、解釈

精神分析療法で治療の根幹をなすのは転移と解釈である。先述したように転移をみてゆくと、解釈とメタファーが極めて深い関係にあることが浮かび上がってくる。〈患者-治療者〉関係の中に、転移を見て取った治療者はそれを患者に投げ返すことで患者に気づかせる必要がある。これこそ精神分析療法でいうところの転移解釈である。乳幼児期早期の母子関係と現在の〈患者-治療者〉関係の中に、相同的なゲシュタルトを感知し、それを言語化して患者に投げ返す営みである。このような解釈を生み出す過程とメタファーが生まれる

過程が同じ論理構造を持つ営みであるという土居の主張は、“vitality affects”の果たす役割を介することによって腑に落ちるものになっていくのである。

解釈、共感、“vitality affects”

転移解釈が、結果的にメタファーを生み出す言語化の過程と構造的に同じであるとするならば、精神療法において、そのような解釈がなぜ大きな治療効果を生むのであろうか。

土居は先に取り上げた「勘と勘繰りと妄想」³⁾において、感情移入ないし共感が「勘」に極めて近いことを指摘し、その理由として、コミュニケーションの質を決定するコンテクストを探り当てることが「勘」の本質的な働きだとすれば、コミュニケーションにおいて最も重要なコンテクストのひとつが感情であることから、「勘が相手の感情に対して働く場合を特に取り上げて精神分析ではエンパシー（共感）と名づけているとってさしつかえないのである」（p. 361）（括弧内は筆者の加筆箇所）とも述べている。「甘え」にまつわる心の動きを感知する際に主要な役割を“vitality affects”が果たしていることを考えると、メタファー的な表現のかたちをとった解釈が精神療法において患者に劇的な変化をもたらすのは、そこに共感的関係が生まれているからに他ならない。

VI. Sternの事例を「甘え」からみる

Sternが提示した事例を「甘え」を通して考える最後に、Stern³⁰⁾が“vitality affects”の意義を論じた著書に記載されている事例の中から、ひとつのエピソードを取り上げ、それを「甘え」を通して見直す何がみえてくるかを考えてみよう。ある乳児と母親とのコミュニケーション場面において、双方の言葉の“vitality affects”をみていくことによって、世代間の心理的問題が浮かび上がってくることを示したものである。

生後9カ月の息子と母親が床の上に横に並んでジグソーパズルで遊んでいた。子どもはパズルの一片を摘んで口の方に持っていった。母親はいつもの声で「いけません。それは食べるも

のではありませんよ。それはパズルの一片よ」と言って、子どもの動きを手で遮った。子どもは「ウン」と声を出して、再びその一片を取ろうとした。すると母親は先ほどよりも強い口調で「駄目と言ったでしょ！」と繰り返した。その子は「ウン、ウン」と（さらに強い声で）反応した。母親はますます強い声で「駄目でしょ！ それは食べるものではないのよ！」と言った。子どもはさらに激しく「ウン、ウン、ウン」と声を出した。すると母親は子どもの方に身体を傾けて、眉を下げ、抑揚のない平坦で、かつ怒りを込めた強い緊張のこもった声で、「お母さんに怒鳴りつけるんじゃないの！ 駄目って言ったでしょ！」と言った。するとますます子どもの声は「ウン、ウン、ウン、ウン」とエスカレートしていった。ここで母親は諦め、子どもに降参した。表情は和らぎ、急に誘惑的な微笑みを浮かべながら、母親は椅子に座り直した。そして抑揚のある声で次のように言った。「それはそんなに美味しいの？」すると子どもは一片を口の中に入れた。母親は子どもに勝利の代償を払わせた。軽蔑したように鼻をびくびく動かしながら、少し勝ち誇ったような声で母親は言った。「それはただのボードよ。それがそんなに美味しいの」（pp. 146-147）

母親の子どもに対してみせた反応を理解する上でその原家族の特徴が述べられている。つまり母親自身の子どもの時代に、目の前で両親の妻まじい口論が繰り返されていた。何か欲しいものがあると要求し続ける父親に対して駄目と言っても、一向に諦めず主張し続ける。最後に母親は諦めるが、その際父親に対して「あなたは馬鹿よ！ まるで赤ん坊よ！」と蔑みながら口にしていった。このような母親自身の両親の関係性が母子の対話にみられる“vitality affects”を通して再現されているというのである。

Sternのこれだけの記述から余り推測を交えることには慎重を要することは思うが、筆者はこの母子関係と類似した事例に多数出会ってきた。子どもが母親に対して殊更怒りを誘発するような

行動を取る母子例である。この種の行動はこれまで「挑発行動」と称されてきたもので、相手の怒りを引き出す、つまりは挑発する行動だというわけである。筆者はこのような行動が生まれやすい関係性の特徴をみていく中で、子どもに強い「甘え」のアンビヴァレンスを見て取った²¹⁾(pp. 28-32)。そのことが結果的に母子間の負の循環を生み、関係障壁がもたらされるというわけである。なぜ負の循環を生むかと言えば、子どもは母親に対して、かまってもらいたい、相手をしてもらいたい、という「甘え」からこのような行動を取っているが、行動自体が母親には受け入れがたいものに映るために、どうしてもその行動に対して叱咤や拒絶でもって応えてしまうことになる。すると、子どもは「甘え」を突き放されるがゆえに、より一層このような行動を繰り返さざるを得ない。こうして負の循環が生まれていく。自分をかまってもらいたいけれども、素直にそれ（「甘え」）を出すことができず、つい「挑発行動」という表現型を取ってしまっている。このような「挑発行動」の背後に「甘え」を見て取ることができるのは、子どもの母親に対して取っている対人的構えに、「甘えたくても甘えられない」ころの動きのゲシュタルトを感じ取ったからであるが、それは“vitality affects”に依るところが大きいのは先に述べたとおりである。こうして「挑発行動」とみえる行動の背後に子どもの「甘え」を感じ取って対応することによって、「挑発行動」は消退していくことが期待されるのである²²⁾。残念なことに Stern はそこに「甘え」にまつわる心の動きを感じ取っていない。「甘え」概念を用いた「関係性」の視点は、関係介入の大きな武器となっているこ

とが改めて実感させられるのである。

Ⅶ. おわりに

精神療法において「甘え」と“vitality affects”それぞれの概念の果たしてきた役割を比較検討してきたが、本稿で筆者がとりわけ強調したかったのは、屈折した「甘え」の原初段階での表現型がどのようなものかを示すとともに、そこに示されているころの動きのゲシュタルトを明示することであった。なぜなら、屈折した「甘え」は成長段階で実に多様な表現型を取るようになるために、そこでは必然的に「甘え」は多義性を帯びるようになる。誤解が生まれやすいのは、そのことが深く関わっていると思われるからである。本稿で示した萌芽段階での「甘え」にまつわる心の動きのゲシュタルトを“vitality affects”を通して理解し直すことにより、これまで少なからず認められた「甘え」理論に対する批判や誤解を減じることが可能ではないか。そして、それはさらに「甘え」理論の再評価にもつながっていくのではないか。そのことによって、「甘え」というわが国固有の文化の中から生み出された「甘え」理論の存在価値はより一層輝きを増すのではないかとも思われるのだ。それは「甘え」という情動の動きを体験的に理解してきたわれわれ日本人の貴重な文化的財産から生まれたものだからである。

本研究は、大正大学学術研究助成金（平成23年度）によって行われた。

本稿について貴重なご助言をいただきました小倉清氏（クリニックおぐら院長）に厚くお礼申し上げます。

文 献

- 1) 土居健郎 (1958) : 神経質の精神病理——特に「とらわれ」の精神力学について, 精神神経学雑誌 60, 733-744
- 2) 土居健郎 (1960) : 「自分」と「甘え」の精神病理, 精神神経学雑誌 62, 149-162
- 3) 土居健郎 (1986) : 勤と勤繰りと妄想, (高橋俊彦編) 分裂病の精神病理 15, 東京大学出版会, 東京, 1-19 ; 土居健郎 (1994) : 日常語の精神医学, 医学書院, 東京, 348-366, 所収 (本稿での引用頁数は土居 (1994) に依っている)
- 4) 土居健郎 (1971) : 「甘え」の構造, 弘文堂, 東京

- 5) 土居健郎 (1998) : 「甘え」概念の明確化を求めて——長山恵一の批判に応える. 精神神経学雑誌 100, 322-330
- 6) 土居健郎 (1999) : 「甘え」概念再説——長山恵一氏の反論に寄せて. 精神神経学雑誌 101, 971-972
- 7) 土居健郎 (2001) : 続「甘え」の構造. 弘文堂, 東京
- 8) 土居健郎 (2009) : 臨床精神医学の方法. 岩崎学術出版社, 東京
- 9) 井村恒郎, 新福尚武, 荻野恒一, 武村信義, 西園昌久, 小此木啓吾, 土居健郎 (1968) : 甘え理論 (土居) をめぐって. 精神分析研究 14 (3), 2-23
- 10) 木村敏 (1994) : 心の病理を考える. 岩波書店, 東京
- 11) 小林隆児 (2000) : 自閉症の関係障害臨床——母と子のあいだを治療する. ミネルヴァ書房, 京都
- 12) 小林隆児 (2001) : 自閉症と行動障害——関係障害臨床からの接近. 岩崎学術出版社, 東京
- 13) 小林隆児 (2003) : 広汎性発達障害にみられる「自明性の喪失」に関する発達論的検討. 精神神経学雑誌 101, 1045-1062
- 14) 小林隆児 (2004) : 自閉症とことばの成り立ち——関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界. ミネルヴァ書房, 京都
- 15) 小林隆児 (2008) : よくわかる自閉症——「関係発達」からのアプローチ. 法研, 東京
- 16) 小林隆児 (2009) : 乳幼児期の関係障害とおとなの発達障害——甘えのアンビバレンスに着目して. そだちの科学 13, 20-25
- 17) 小林隆児 (2010) : 学童・思春期の子どもたちに今何が起きているか. 教育と医学 58, 116-127
- 18) 小林隆児 (2010) : 自閉症のころろをみつめる——関係発達臨床からみた親子のそだち. 岩崎学術出版社, 東京
- 19) 小林隆児 (2010) : 関係からみた発達障害. 金剛出版, 東京
- 20) 小林隆児 (2010) : メタファーと精神療法. 精神療法 36, 517-526
- 21) 小林隆児 (2011) : 子どものうつ病を通してみえてくるもの. 子どもの心と学校臨床 4, 82-93
- 22) 小林隆児 (2011) : 関係からみた「勘と勘繰りと妄想」(土居健郎). 精神療法 37, 327-336
- 23) 小林隆児, 原田理歩 (2008) : 自閉症とこころの臨床——行動の「障害」から行動による「表現」へ. 岩崎学術出版社, 東京
- 24) Koppe, S., Harder, S. & Vaever, M. (2008) : Vitality affects. International Forum of Psychoanalysis 17, 169-179
- 25) 鯨岡峻 (1999) : 関係発達論の構築——問主観的アプローチによる. ミネルヴァ書房, 京都
- 26) 長山恵一 (1997) : 「甘え」現象の基本的構成と特性に関する考察——甘え理論 (土居健郎) の明確化を通して. 精神神経学雑誌 99, 443-485
- 27) 長山恵一 (1999) : 「甘え」概念の相対化を求めて——土居健郎氏の討論を読んで. 精神神経学雑誌 101, 51-59
- 28) 小倉清 (2010) : 土居健郎という人物について. 精神分析研究 54 (4), 323-330
- 29) Stern, D. (1985) : The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. Basic Books, New York. 小此木啓吾・丸田俊彦監訳, 神庭靖子・神庭重信訳 (1989/91) : 乳児の対人世界 理論編/臨床編. 岩崎学術出版社, 東京
- 30) Stern, D. (2010) : Forms of Vitality: Exploring Dynamic Experience in Psychology, the Arts, Psychotherapy, and Development. Oxford University Press, London
- 31) 竹友安彦 (1988) : メタ言語としての「甘え」. 思想 758, 122-155
- 32) Werner, H. (1948) : Comparative Psychology of Mental Development. International Universities Press, New York. 鯨岡峻, 浜田寿美男訳 (1976) : 発達心理学入門——精神発達と比較心理学. ミネルヴァ書房, 京都

"*AMAE*" (DOI) AND "VITALITY AFFECTS" (STERN) :
WHY IS "*AMAE*" THEORY FREQUENTLY CRITICIZED OR MISUNDERSTOOD?

RYUJI KOBAYASHI

Department of Human Sciences, Seinan Gakuin University

In the realms of psychopathology and psychotherapy, the theory of *amae* — an original concept developed by Doi in Japan, has gained global recognition approaching academic universality. Nevertheless, criticism and misunderstanding of the concept is not uncommon, even today. A major reason for this is the distorted image brought to mind in many upon hearing the term *amae*. Doi regarded *amae* as a concept — indicating the possibility of its existence as a subconscious drive, in suppressed or negated forms in cases where it is not overtly visible. Misinterpretation of *amae* as a concrete phenomenon has contributed largely to this misconception. Through clinical practice in support of relational development, the author has noted the presence of ambivalence surrounding *amae* as a central issue among the majority of children with autism spectrum disorders. Impressed by Doi's endeavors to further psychopathological understanding and opening up new possibilities for psychotherapy along the axis of ambivalence surrounding *amae*, the author has been attempting to refocus attention on Doi's *amae* theory from his own vantage point.

This paper is part of this attempt, through which the author presents how *amae* extends beyond the readily visible distortions of the phenomenon, describing how ambivalence surrounding *amae* manifests in the primeval stage of development, i. e., during infancy, alongside discussion of how the theory of "vitality affects" — one of Stern's key concepts — can be used to render ambivalence in *amae* easier to grasp. Moreover, taking Doi's dissertation on the relationship between metaphors and psychotherapy a step further, the important role "vitality affects" play in generating metaphors and in perceiving ambivalence surrounding *amae* is demonstrated, showing how the process has much in common with the understanding of transference and interpretation in psychoanalytic psychotherapy. In sum, the author proposes the possibility that re-interpretation of the dynamics surrounding *amae* in terms of "vitality affects" should be capable of minimizing the criticisms and misunderstandings regarding the theory of *amae* to date.